

院長のひとりごと2

テーマ「コロナ禍の病院運営について」

大変長らくお待たせしました。コロナ自粛が始まり、早六ヶ月、皆様いかがお過ごしでしょうか。久しぶりの「ひとりごと」投稿でございます。

当院では四月一日より職員の自粛が始まり、「**外食禁止、複数での飲食禁止**」を未だに継続中であります。これまでコロナ陽性の患者さんを数名緊急入院で受けましたが、当院は「入院指定医療機関」ではございませんので転院をして頂きました。また、当院は「帰国者接触者外来」の指定を受けておりませんので、独自の発熱外来を立ち上げ、かかりつけの患者さんを中心に受付をしております。遠賀中間地区では二十数名ほどの陽性患者が発生しており、気が抜けない状況が続いています。

四月には、入院コントロールをしたこともあり、平成十五年六月の開院月以来、初の経営悪化がありました。しかし、七、八月に入り患者さんも増えてきて、(他の急性期病院でクラスターが発生し、当院へ集中したことも関係しますが)八月には過去最高となる734名の救急患者数(過去最高は680名)となりました。救急搬送の患者さんの中からもコロナ陽性者があり、職員は、感染防御をして自分の身を守りながら患者さんのケアを行っています。

「**自分の身を守ることが、患者さんを守る、家族を守る、病院を守る**」を合言葉に。

自粛解除も他病院でのクラスター発生状況等を見ながら「**後出しじゃんけん**」でゆっくりと解除せざるを得ないと考えています。

四月に新しく入職した約百名の職員の教育も明らかに不十分と思われ、これも頭を悩ませるところです。今回のコロナ感染症は、五十歳未満の患者さんは重症化しにくく、無症状も多いため、感染源となることが問題です。病院職員としてしっかりと自粛し、しばらくはこの嵐が去るのをじっと耐えるしかないようですね。

令和二年九月三日 藤井 茂

第二十一章

